

さらに地覆石はL字型の入階用のもので、土壇張り出しのつけ根にあること、この張り出しは門一柱間分、二ヶ所の間隔は五柱分であり、大極殿基壇北側の東と西の石階の痕跡であることなどが判明した。又、この大土壇はその大きさ東西四三米（一四〇尺）、南北二米（七〇尺）、階段の長さから推定して高さ二米（六・六尺）、南北両側とも三ヶ所ずつ石階があったと考えられ、内裏の前面中央に位置している。背後には回廊を伴う付属建築物が存在しており、宮殿相互の距離が平城宮のそれとよく似ていることが判明した。この結果当時の大極殿は、地表面より六尺の高さに盛土し、凝灰岩の切り石をその土どめに用い、前後に三個ずつの階段を有し、正面のそれは巾一六尺奥行九尺であり、建物の周辺は小石をしきつめていたのである。奥行は七二尺、東西約一五〇尺であったと推察される。背後の建物は、東端だけであるが基壇を発見したのである。東西三米（一一〇尺）、南北一三米（四〇尺）ほどの大きさと推定され、小安殿と考えらる。ここにとりつく回廊は天平尺一〇・五尺、五尺二間の梁間で、柱の直径約四〇寸の堀立柱である。次は大安殿である。その規模は柱間で東西九間、南北四間、柱の心の間隔は天平尺一〇尺、柱の直径一尺五寸で深く土中に入り、中央六本は束柱、通し柱は合計四十四本と判定しえた。まことに簡素なプランで、おそらく高床式の宮殿であったと考えられ、中央の大広間には高御座が据えられていたであろう。内裏の回廊は東西南の三方が判明しており、東西六〇〇尺、築地塀までの距離を入ると実に七二〇尺で内裏の間口は約二町となり、壮大なものであったと思われる。

これらの宮殿や回廊はすべて真南北の方位を保っており、大極殿まわりの溝渠は凝灰岩の切り石で大回廊の外側には築地塀がめぐらされており、その上部は聖武朝にあつては屋瓦をもって葺いたようである。重閣文系のものであったと思われる。宮殿の屋根の多くは草葺き、板葺き、檜皮葺きであつて、最後の難波宮、すなわち聖武天皇の神亀、天平年間の造営では瓦葺きであつたと考えられる。

中国長安の大明宮は、唐初太宗李世民的創建であり、それを親しく見分した日本の留学生が帰朝し、それを模して建築したのが我が長柄豊碕宮であろう。この難波宮の遺跡を埋蔵した地域は、昭和三九年五月に史跡国家指定になった。まことに古文化財を大切に保存することは我々現代人に課せられた責務であるが、それは又、ひとり日本の古文化としてのみならず、東洋における世界文化の遺産であり、我々万人の心の故郷でもあるところに深い意義のあることを思うのである。

学 校 と 教 育

——現代におけるフランス教育の動向——

本学教授 柴 田 良 稔

一般的にいつて、今世紀の教育学の特徴は、一九世紀がいわば個々の地盤に建築された個々の建築であつたのに対し、広い地盤に立つ共同建築という様相を呈していることが指摘される

であろう。このことはフランスの教育学でも同様であつて、すなわち教育に対する関心は、今や特定の個人の問題ではなく、社会全般のものとなつており、新しい教育の理念・教育の理論の吟味・実践等が、個々人の主観よりも広い国家的・社会的の地盤の上に立つて考察されようとするに至つておることは、フランス教育学においても明らかにみとめられる特徴である。換言すれば、フランスの教育思想は到るところ、大きなまた小さな泉から流れ出で、それぞれの立場から教育の問題に分与しようとすることを示しており、その構造が直線的から立体的になつた点に時代の動向をよみとることができる。

しかし、こうした世界共通の傾向と並んで、その基本的性格において、他の諸国のそれと一段ときつたフランス教育学の特性をどこに求めたらよいであらうか。われわれはこれを次の点にもとめようと思う。

フランスは、周知のように、ながい文化伝統をもつた保守的な国であると同時に、あのフランス革命を生んだ合理的精神の生きている国である。そこには全体の見通しのもとに将来を大きく明確にとらえてゆく透明な合理主義の精神、いわゆる「幾何学の精神」が典型的にはたらいっていることがみとめられる。現在進行中のフランスの教育改革のエネルギーは、まさにこのバック・ボーンに支えられているのである。

ところで、ラビーによれば、フランス教育学の成立は十六世紀であり、アリストテレスの権威を中心としたスコラ教育学 (pédagogie scholastique) に対する反動として生まれた自由主義教育学 (pédagogie liberale) として性格づけられるもの

である。すなわち、ラブレ、モンテーニュ、デカルトにはじまり、十八世紀ラ・シャロッテ、ルソー、十九世紀コンドルセ、ラカナル等に受け継がれた伝統であり、自由、理性、世俗性、民主性をもつて一貫する原理としている。

合理主義に関しては、フランス人は次の期待をもっている。健全な悟性、良識こそ実際の教師であり、それさえあれば、他のいわゆる教育的訓練を必要としないということ、これである。従つて、フランスの家庭及び学校における教育の目標は、はつきりと理性におかれ、日常用語にもそれがよく反映している。例えば、avoir raison (もつともである)、faire raison (説明する)、avoir raison de ses vices (悪徳にうちかゝる) という言葉や、フランス人にとつて「非理性的」といわれることほどつよい非難はないということのうちに、彼らの生活信条がよく暗示されていると思う。

しかしフランスの教育制度の複雑さが示すように、それだけでは割り切れない側面がフランス精神にあることも忘れてはならない。人間性の深い理解にもとづく「繊細の精神」ともいふべきものがこれである。それは個性尊重の精神ともなり、フランス人の国民的誇り、伝統尊重の精神もここから生まれるのである。この両者は相互に敵対しつつ調和し、そうするところにフランスの文化と教育を織りなす基本的性格をかたちづくつているのである。

ポルドー大学のシャトーが「フランスは、デカルトの国であるとしても、また同時にモンテーニュの国でもある」と述べ、フランスの性格はむしろ後者に近いと述べているのは、單なる

幾何学的精神^①。につきないフランス的性格の一つの側面をよく指摘したものである。このことは今日のフランス教育制度の複雑さをみればよく了解される。彼らは、外国の異質の制度を無批判に移植するのではなくて、制度そのものを生きものとして捉え、現にあるものの中から新しい運動をよみとり、それを内部的に発展させてきている。或いは地質学上の沈積作用のように、新しい洪積物が次々に重ねられて、後のものが先のものを改めてゆくといつてよいかもしれない。すなわちその改革の大半は、継続的な決断によって生じたものであり、その改革の各々はしばしば無名性につつまれる。その一例として、パリ大学の成立史が挙げられる。それは何時誰によって創設されたものであるかをつまびらかにしないということなのである。デュルケムによれば、「それはいつあらわれたのかの正確な期日を確定しえないほどの不断の進化の結果であり、一般的原因の結果である。」つまり、時の経過とともに最初無定形であった集合体が、諸物の勢力に促されて組織されるようになったということなのである。

こういった性格は、理念の大胆さにもかかわらず実行には極度に慎重なフランス教育学の特徴をなすものである。つまり、数多くの疑問の多い仮説にもとづく教育理論よりか現実の有効性を念とする日々の教育実践から生まれた教育学を重視するのである。実験室に閉じこもってけっして街頭に出ようとしないう人びとによってなされる実験教育学に対するフランスの教育界の疑問は、局所合理主義への批判的態度のあらわれでもあらう。要するに、フランス教育学の特色は人間学的だということである。

ある。すなわち人間学は、思弁的に行なわれるのではなく現象学的^②に行なわれるという点で経験的である。それは、人間の世界に対する人間の直接的な関係から出発する。このような直接的関係を、ひとは「経験」と呼んでいるが、人間学は、この経験を扱う際、原初的——基本的な、したがって、科学的——専門的な方法以前にある方法、ひろい意味で「現象学的」と呼んでいる方法をとるのである。

そういったわけで、フランスの教育学は、不断に教育的状況に立たされている現場教師と専門学者の協力において、すなわち各分野の人びとのエネルギーによって支えられたものである。一九五二年、ベルギーのアントワープで開かれた国際教育学会議において、ストラスブルグ大学のモリス・ドベスが述べたように、フランスにおける教育研究活動の動向を大学だけで見るとは、フランス教育学の状況を見誤ることになるのである。フランスにおける教育研究機関は大学の他に、大学をこえた研究組織でおこなわれており、それらがフランスの教育界に方向を與えている。すなわち、パリ及びマルセーユの「職業指導国民協会」(Institut National d'Orientation Professionnelle)、「高等研究実用学校」(Écoles Pratiques des Hautes Études)の児童心理学実験室、セーヴルの「国際教育センター」(Centre International de Pédagogie)その他の機関は、それぞれの立場からあらゆる教育学の課題にとりこんでいるのである。

一方、教育的現場の生みだした匿名的エネルギーの成果のことも顕著な例としては、母親学校(＝幼稚園)の発展があげられる。この機関は、フランス教育制度におけるもっとも顕著

な発達を遂げた部門であるが、決して或る特定の個人やグループの計画によってつくられたものではなく、多数の人びとのイニシアティブが不断に統合されて出来上ったものである。すなわち、フランスにはフレーベルやモンテッソリのごとき教育史上一時代を劃する人ではなかったが、にも拘わらずそこに独自の発展をみとめることができるのである。一八九九年、ケルマゴール夫人によって一冊に纏められた論文に、モンテッソリのとりあげた問題——感覚の教育・子供の自由・教育的遊戯の役割等のテーマをとりあげているのを見ることは興味深い。

次に小学校教師の養成機関たる師範学校で、大学において極めてつましい位置をしか与えられず、まして一般の中等教育機関ではいかなる位置をも占めなかった当時に社会学の講座がおかれたということはフランスの教育界の独自の方向を示すものといえる。デュルケムに負うところの多いこの伝統は、教育学と社会学との緊密な連繫をもたらした。こんにちでは、教育についての学問が、社会についての学問、すなわち社会科学と不可分の関係にあることは自明の理とされているが、当時としては一つの前進であり、フランスの教育学が、哲学から社会学への途を一步踏み入れたという点で意義がある。

また児童心理学の研究も、教師養成機関によってなされており、師範学校の附属校はその附属研究所を設立してその研究に専念した。ポール・セザリは、これらの学問は自由教育の発達に刺激されて生まれたものであると指摘しているが、そのことは正しいであろう。サン・クルー、フォントネイ高等師範学校は、この心理的教育学の中心となった。

以上は主として教育の基礎理論的研究部門についてであったが、実践面において戦後リセー（国立中学校）に設置されたクラス・ヌーベル（新学級）は、或る意味で中等教育の従来の伝統へと挑戦ともいふべきころみであったので一言しよう。

すなわちこれは、中等教育改革への実験学級であり、在学生徒数を制限し、活動的方法を採用し、カリキュラムを統合し、親と教師と研究者が緊密に連繫をたもち協力してやることに特徴がある。しかし決してわが国の新教育運動のような流行にならなかった点に、実行において慎重なフランスの特色がみられる。その理由としては、有能でかつ熱心な多くの教師を求めがたいことと、何よりも財政的理由から、これを全国的に画一的に実施されがたいことの認識からであったが、現場の側の批判としては、理想的条件の下での教育的成功の経験は、決してこれを一般化しえない。その成果は直ちに方法の価値を決定するものではなく、普通の条件で教育的タクトを働かすにかえてマイナスになると判断されたからである。

以上によって、フランス教育学において実験教育学が或る限定した位置をしか占めなかったことの理由が明らかにされるとともに、経験に足場をおく実践的理論への信頼の理由もあきらかになったわけである。

扱て、フランスの教育学を支えているものは、専門学者とともに一般人の知性であろう。教育問題への彼らの参加はまことに多面的である。ところでこの多面性は決して無秩序ではない。社会の各層からの積極的発言は、それぞれ国民教育の改善

という共通の目的へ結集する。そしてそれは教育学を育てる土壌として重要な機能を果たすのである。

実際、フランスでの重要な教育研究は、そのための専門機関外でなされたものが多い。ユイエ・ロバン・ベルジュロンは医学者である。教育の現場よりの教育学的寄与も多い。心理学も実験心理学よりか、ギョームヤンシャトーにみられるように、自然的場面での観察を重視する研究方法が目立っている。それは教育学におけるフランス的「繊細の精神」のあらわれといつてよい。調査統計は、観察から生まれた仮説の確認としてのみ意義をもつ。アランの教育論が統計資料より尊重される理由もこの辺にあるのであろう。

フランスの科学者は一方ではすべて哲学者であり、自らを専門化しながらも決して巨視的視点を失わない。デュルケム・ギョーム、ユーベル・シャート等、彼らは、すべて単なる体系化への欲求から解放され、新しい知的冒険をたえずこころみている。いわゆる専門閉塞性をやぶろうとするとそこにその特色があるのである。

もし、ひとが単なる専門的視点だけでフランスの教育学をみるなら、専門家が少くないということで、フランスの教育学は貧しいということを卒直に認めるほかはない。しかし特定の個別科学としてではなく、一つの展望としての教育学という視点において眺めるならば、フランスには過去において、ビネー、デュルケム、リボー、現代並びに近き過去において、ランジュバン、ワロン、アラン、ドベス等をもっている。彼らはよくとして可ならざるはなき才能をもって独自のフランス教育学を樹立

した。例えば、ワロンは、医学・社会学・実験心理学・教育学・生理学を一つの視点によって統合した教育学を打ち立てた。また彼は、ランジュバンとともに現代のフランスの教育改革の指導的人物として、第一次大戦中より第二次大戦後を通じて、フランス教育の民主化と現代化を推進したのである。

結び

職業としての学問は、そのにない手に対し、いろいろな影響を与えるであろうが、いわばその学問を通じてゆたかになり、より成熟する場合と、逆に人間性を萎縮させ貧困にさせる場合がある。後者の危機は、その専門閉塞性のために、必要な精力と時間の使用をかたよらせ、より広い環境世界との接触を閉じてしまうことである。この点、フランスの教育学はユマニスムの伝統をうけつぎ、展望的な研究方法への途をひらくことによってその危険を脱したものだといえる。

われわれは、一見きわめて保守的なフランスの教育が、時の単位を二十年、三十年にとる時、めざましい進化を遂げていることに驚かされるのであるが、この理由はフランスの教育学が、人間的エランの解放をめざし、固定的真理を信せず、逆に真理探究の動的姿勢を不断に保持する点に求められると思う。かくて、フランスの教育学を貫く理念は、開かれた伝統主義 traditionalisme ouverte (Jules Ferry) だ、ということになるであろう。